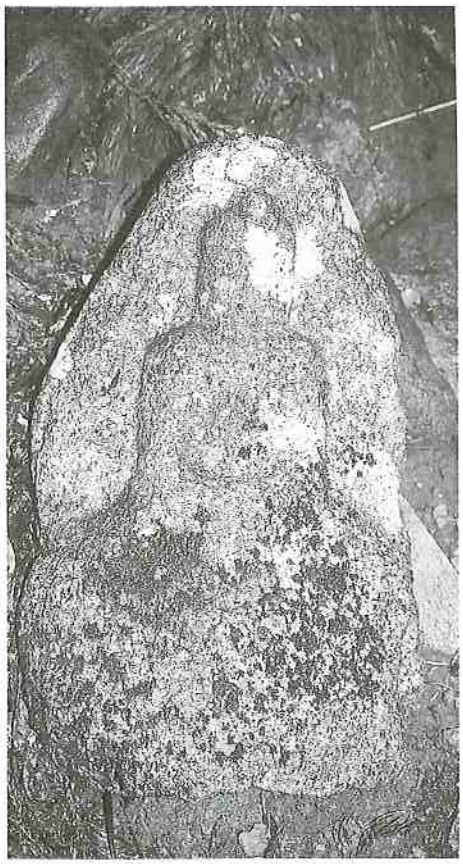
かも市史だより

平成15年9月
No.8

◆編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

■ 加茂の中世石造物 ■



▲ 下高柳善興寺にある石仏

▲ 黒水東区にある板碑

▲ 宮寄上、通称「広田の塚」にある宝篋印塔

加茂市内には、中世（鎌倉時代～戦国時代）につくられた石製の信仰遺物が現存しています。それらの種類としては、板碑・宝篋印塔・石仏などが確認されています。

板碑とは、碑面に主に梵字を刻む供養碑で、市内ではバン（金剛界大日如来）が多いですが、ウーン（阿閦如来）やキリーク（阿弥陀如来）などもみうけられます。越後では、多くが河原石を用いたものですが、市内のものは板状で頭部を山形に加工して二条線を刻むといった武蔵型板碑の影響を強く受けているもので、異色の存在です。十数基が確認されています。

宝篋印塔は、元々宝篋印陀羅尼経を納めるものでしたが、日本では、供養塔あるいは墓塔として造られました。市内では、宮寄上に十四世紀代のものが一基あるのみであり、近世初期頃大量に造られたものが、小貫墓地などにあります。

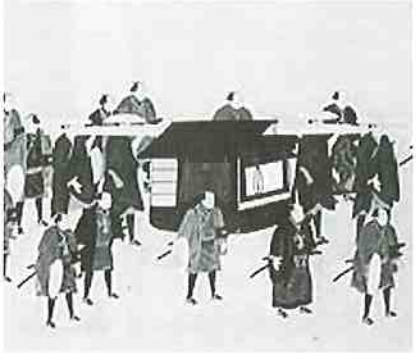
石仏は、善興寺で一基が確認されているのみで、河原石を用いて下半を埋め込むものです。阿賀北で多くみられるもので、現在のところ加茂市がその南限となります。

これらの石造物は、当時を語る生証人であり、中世人の願いを今に伝えるものです。

（考古・古代・中世部会　水澤幸一）

村松藩の参勤交代と七谷組

江戸時代、大名は一定期間ごとに、江戸に出て将軍に出仕しました。これを参勤交代と言います。村松藩堀家三万石の参勤交代は何時から始まったのでしょう。江戸から村松へは何日かかったのでしょう。九代藩主堀直央の帰国の事例を紹介します。



▶ 参勤交代の様子を描いた江戸時代の絵巻（「盛岡藩参勤交代図巻」より）

村松から見附を通り、長岡で三国街道に合流する街道は、村松領内の主要街道で、村松藩の参勤交代に使われていました。道中には黒水・鹿峠・長沢・見附の宿場がありました。

村松藩の参勤交代は、明暦二年（一六五六）から開始されます。村松藩は寛永二十年（一六四三）に、直吉が八歳で父直時の遺領三万石を相続しますが、若年の藩主を国元に帰さぬ幕府の方針で、直吉は十九歳になった明暦元年に初めて帰国を許されたからです。

里程は、江戸と長岡間が七六里、長岡と見附間三里、見附と村松間九里の合わせて八八里（約三四五キロメートル）でした。

参勤交代の歩行は、一日一〇里が平均的な速さで、村松まで八泊九日の日程が必要でした。

帰国の時は六日町から長岡まで川船の便があり、これに乗船すると、一日短縮されて七泊八日で到着しました。帰国の時の様子を一例で見てみましょう。

天保九年（藩主直央の帰国）

六月二日江戸発、桶川泊、三日本庄泊、四日渋川泊、五日須川泊、六日二居泊、七日六日町泊、八日見附泊、九日村松到着。

藩主一行の人数は一六〇人ほどで、六日町で五、六艘の船に分散して乗船し、半日ほどで、長岡の蔵王河岸に到着します。

蔵王には領内の見附三組からの迎えの人馬五〇人・四〇匹ほどが待ち受け、その人馬に送られて見附宿泊となります。

見附には下田三組の人馬が、早朝の出立に合わせて宵のうちから詰めており、翌朝鹿峠宿まで送ります。

鹿峠には七谷組の人馬が待ち受けて黒水宿まで送ります。ここで昼食の用意がしてあり、昼の休憩となります。

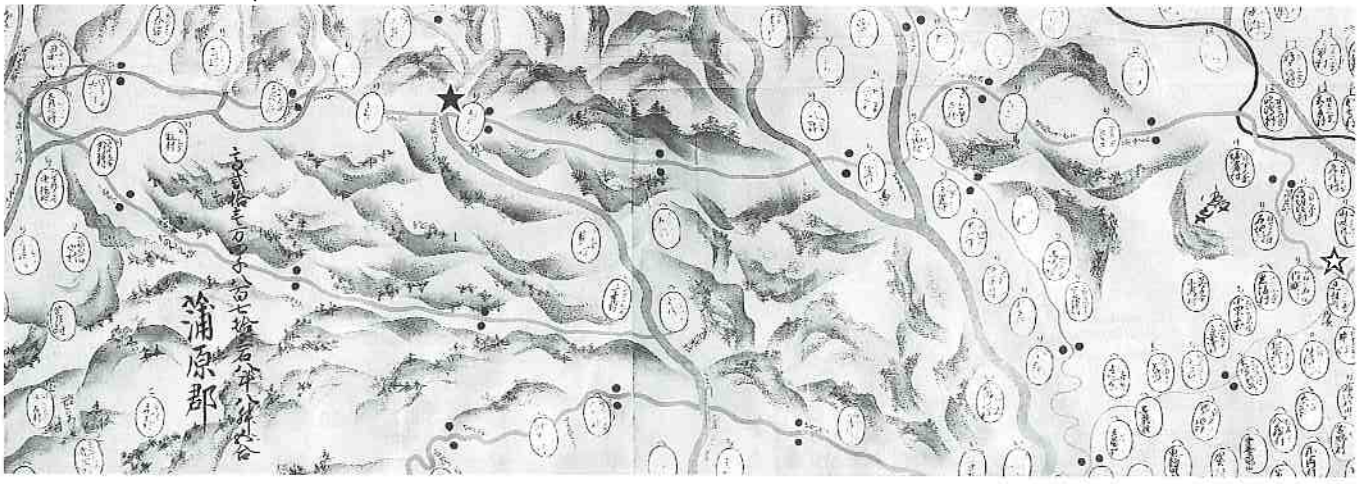
黒水には牧村など下川の人馬が待ち受けて、昼休みの後に、村松まで送り、帰城となります。

長谷村への触れを見ますと、鹿峠詰のほかに、黒水詰が一部加えられています。黒水詰は連絡役をつとめる飛脚と臨時の入用に備えるためでした。

天保十一年藩主直央の帰国は、六月十五日に江戸を出発し、八日の道中で、二十二日には村松に到着する予定でした。しかし、渋川に着いた時、杢川の増水で川止めに遭い、三日遅れて二十五日に戻ってきました。

鹿峠宿に詰めた七谷組の人馬は、三日間詰め切りで一行の到着を待ちました。見附組や下田組はこの間、毎日交代の人馬を出しましたが、七谷は小組で代わりの人馬が出せなかったからです。七谷組はこのほかにも道の補修や清掃、また一行の接待など苦労が多くありました。

（近世部会　桑原　孝）



▼「正保二年（一六四五）越後国絵図」に見る、長岡から見附（☆印）を経て黒水（★）を通り、村松へ至る街道。村松藩の参勤交代の道。見附や鹿峠・黒水の宿場には馬次（うまつぎ）と記されている。

かも私史

福島の薬師講の思い出

下条 諸橋トシ

福島には薬師様が祀られていて、毎年春と秋に庵寺で「薬師講」を開いて、娯楽がなかった時代楽しみにしていたものでした。薬師様は今の諸橋美津雄さん宅の裏手に祀られていて、庵寺は現在の福島公民館の裏手にありました。春は五月八日、秋は九月八日に薬師講が開かれました。

福島の集落はその頃四二軒の家があって、四班に分けられていて、そのうちの一班（約一〇軒）が当番となって、薬師講を開いていました。当番の班は朝の九時ころ庵寺に集まり、料理を作り始め、それが出来上がるころ合いに、皆が集まり、大昌寺様も来られてお経を上げ、説教を聞いて、皆で料理をいただいたものです。この料理の材料の米や野菜は各家の持ち寄りで、外に豆腐や油揚げは講中で買って、当番の家の人たちも茄子漬けなんかの漬物を出したものです。家々から出した野菜も春なら竹の子とか、秋なら茄子とか、季節に家で取れた野菜でした。

▶福島の庵寺跡　手前庵寺跡。左手廃屋は、右手の米山塔近くの白山社お堂を移したもの。

薬師講は女中心の講でしたが、その家の女の人が用で出られない時は男が出たものです。薬師講は福島に昔からあったようですが、私が初めて参加したのは、戦後の昭和二十一、二年で四十歳近い頃でした。講は嫁姑の関係もあり、あんまり若い嫁の参加はなくて、嫁の座がしっかりした女の人が参加していました。姑から「シメたげぇていぐような嫁は騒がねぇもんだ」と言われたものでした。

庵寺は今、すっかり面影はないですが、私の七、八歳の頃まで庵主様が居て、庵主様が去られてからは、大昌寺の隠居された長老様夫婦が住んでいて、この方も大正七、八年まで居られたようでした。この薬師講は昭和三十八ないし四十年頃まであったようですが、今は行われていません。娯楽も沢山あるようになったからでしょうか。

（談　明治四十二年生）

半生をかえりみて

五番町 目黒カズ

私が和裁を習いに出たのは、尋常高等小学校の高等科を卒業した大正十五年のことでした。多くは小学校を終えるとすぐ就職するようなご時世で、朝六時になると、彼女らの就職した川徳さんという近所の機屋さんからガチャガチャ音が聞こえてきたものでした。

今の西宮橋付近にあった和裁教室は個人経営で就学期間は決まっておらず、三か月の人、一年いる人、と様々でした。私は三年通い、袴や、祭りで赤子に着せる産着、婚礼で羽織る江戸褄など、沢山の縫い方を覚えました。

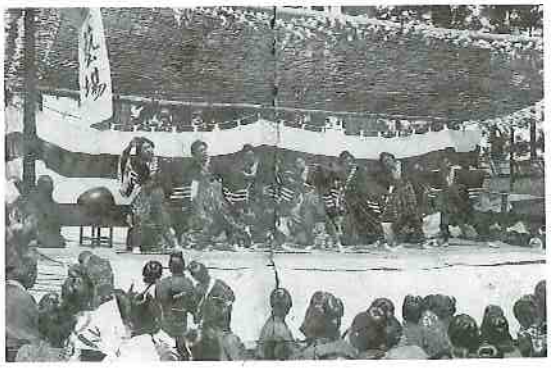
修行期間を終えると、家で裁縫仕事を始めました。呉服屋さんから期限を切って注文を受けるのです。普段はそれでいいのですが、葬儀があると「朝までに喪服を仕上げてくれ」という急な指導がくるのです。そうすると一晩寝ないで縫うことになりますが、生活のためと思って不思議と苦しみは感じませんでしたね。

もちろん楽しみもありました。昭和の初め頃までだったか、川徳さんは従業員へのサービスを兼ねて毎春加茂山で出し物を催して、その見物には皆着飾って出かけたものでした。また四月十五日には十二王（「十二夜」とも）様という地区で祀るお社の祭礼がありました。この時期には餅草が繁るので、この日はどこの家でも杵臼を出して草餅をトントンと搗きました。あの当時お餅はご馳走だったので、やはり楽しみでしたね。

町内祭りは戦争を境に規模が縮小されましたが、それでも少し前まで十二王様を奉賛する幟を始め、柱を建て提灯を掲げるなどしていました。それが近年は高齢化も進み、とうとう今春はお休みとなりました。

（談　明治四十四年生）

◀話者六歳の頃　祭りや正月に結う菊髷（きくまげ）姿。普段はイッチョ（銀杏）返しという髪型を結っていた。



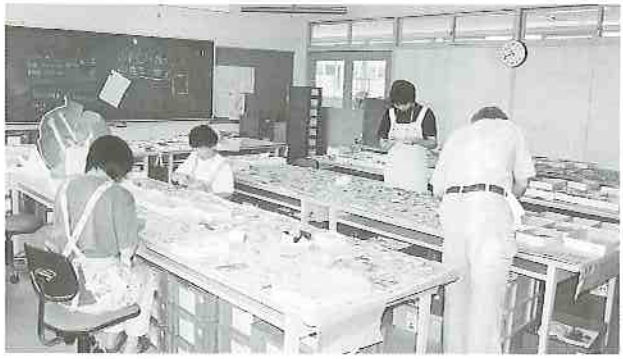
◀川徳工場の春祭り（大正七～八年頃）　踊り子は川徳工場の従業員。舞台を見物する客の多くが菊髷を結っている。

探しています

◆ 先日、民俗資料館に民具などの資料寄贈のお話があり、お宅にお邪魔させて頂いた際に加茂市内のどこかで拾われた土器や石器が飾られている様子を拝見しました。皆さんのお宅にもご家族のどなたかが拾われた土器や石器が眠っていませんか。子供の頃、山や畑にやじりなどを探しにいったことはありませんか。物置で埃にまみれていても、ばらばらになっていても結構です。是非見せて頂けませんか。

土器の破片や石のかけらなんか何の役にも立たないと思われる方もいらっしゃるかも知れません。私たちはそんな小さな資料を手掛かりにして、加茂の歴史を明らかにしたいと考えています。土器の破片であれば文様からある程度年代が知られます。石器も形から時代を推測することができます。

皆様がお持ちの遺物から私たちがいままで知らない遺跡が発見されたり、具体的な遺跡の年代が明らかになることを期待しています。多くの情報が寄せられることをお待ちしています。



▲ 遺物の地表採集の様子（上）とその後の整理作業

◆ 戦後五十八年、衣食住がすっかり様変わりしました。戦前を偲ばせる、次の衣類の情報を求めています。

§ 野良仕事で用いたヤマギモン（山着物）

§ 藁クズを詰めたクズ蒲団の皮

§ 乳母祭りで乳児にかけるカケギモン（掛着物）

◆ 平成十五年一月、八十里越を越えた福島県只見町では、昔、加茂から運ばれた加茂縞の仕事着が、国の重要有形民俗文化財に指定されました。

本家の加茂では古い加茂縞は見られなくなりましたが、市民の皆さまの中で、古い生地でも仕事着でもお持ちでしたら、お知らせ下さい。

▶（左右とも）加茂縞の仕事着

◆ 「御先祖様が腹痛を起こしたから正月に餅は食べない」

「神様がゴマの切株に躓き眼を傷めたから、ゴマは食べない」

など、かつて特定の日には特定の品を食することを避ける禁忌食の習慣が広く存在しました。祖父母の代から伝わったというような、こうした事例をご存知の方はおられませんか。

編集後記

今号で告知のとおり、『レポート加茂市史』第二号をこのほど刊行いたしました。古墳時代から現代まで、おおよそ一五〇〇年間に渡る加茂の様子を多角的に追っています。お陰さまで増刷するほどの好評を博した創刊号ともども、ご一読をお願いいたします。

なお、市史編さん室では事業へのご意見・ご要望をお待ちしております。

好評発売中

「レポート加茂市史」

創刊号 ～ 第2号

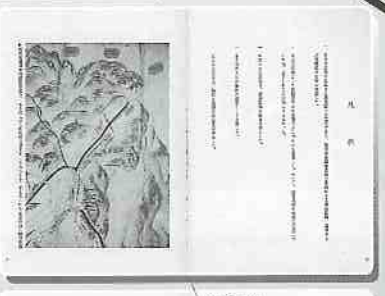
☆第2号目次より☆

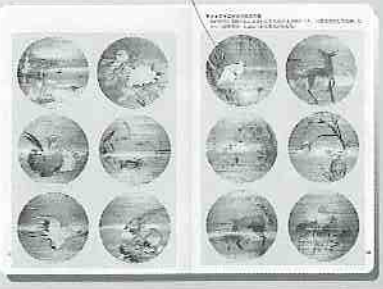
「加茂地域の古墳時代」

「東芝加茂工場争議について」

「民俗調査のノートから
ー食べものとくらしー」

ほか計7編 写真・図版多数





■A5版 約150ページ

■1部 1,000円